

## <追悼文> 『沖縄風物誌』 のことなど

新崎, 盛暉

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

1995-02-24

## 『沖繩風物誌』のことなど

新 崎 盛 暉

今からちょうど10年前、1984年の晩秋、北日本から初雪の便りが聞かれるようになったある日、『週刊ポスト』編集部から電話があって書評を頼みたいという。本は、中本正智さんと比嘉実さんの『沖繩風物誌』だという。僕は、二人の著者の名前を聞いただけで「専門分野が違い過ぎて僕の手には負えませんよ」と答えた。だが、担当の荒川教之さんは、別に専門的な本ではないからとにかく読んでみる、という。荒川教之さんなどと親しげに呼んでいるが、この担当者と面識があるわけではない。

今はどうか知らないが、『週刊ポスト』の書評欄は、鶴見俊輔、山口昌男、いいたももといった人びとが選考委員をしており、荒川さんはその欄をずいぶん長い間—多分10年ではきかないだろう—担当していた。僕は80年代の初期に『奄美農村の構造と変動』（松原治郎他編者、お茶の水書房）という大きな本の書評を引き受けたことがあった。また、僕の『沖繩考—琉球弧の視点から—』（凱風社）という本を花崎皋平さんに書評をしていただいたこともある。

そんなわけで、『週刊ポスト』の書評欄には親近感を覚えていたのだが、著名な琉球の言語と文学の研究者の本とあっては、いくら無鉄砲な僕でも尻込みせざるをえなかったのである。

こうして、なかば押し付けられるようにして引き受けた書評であったが、本を開くと、忙しさを忘れて—当時僕はまだ沖大の学長をしていてくだらない雑務に追いまくられていた—、引き込まれるように読み進み、一気に読み終えてしまった。

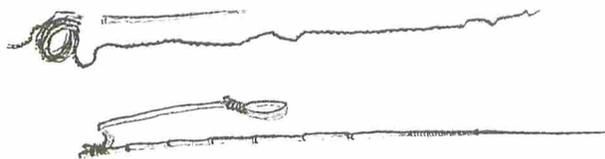
これまで、何十冊もの本の書評をしてきたような気がするが、読んで得をしたと感じる本は、そう何冊もあるわけではない。『沖繩風物誌』は、そうした数少ない本の一つだった。もし書評を引き受けなかったら、僕はこの本を読みそこなっていたかもしれない。

僕はそれまで、中本正智という僕と同じ年に生れた高名な言語学者のキャリアは何一つ知らなかったから、この本の生活体験のにじみ出た記述がとくに印象深かった。なかでも、サバニに乗って嵐に出会ったらどうすればよいかを、こと細かく記述した部分など、今でも記憶に残っている。沖繩では、今なお、古代から現代まで、海人（ウミンチュ）から高名な言語学者までが、一人の人物の中に体現されているのだ、といたく感銘を受けたものである。

それ以後、中本正智さんに会うと、背広とネクタイの中本さんに海人の姿を重ね合わせて想像してみるのが、僕の習わしになってしまった。

僕の中に残る中本正智さんのイメージといえば、酒を飲んで談笑している姿である。そんな談笑の席で、僕は、どうやら中本さんが“琉球独立論者”らしいことに気づいた。そこで、僕たちの勉強会で、“国語と方言について”話をしてくれるように頼んだことがある。1989年から90年にかけて、僕が東京に出てきていて、県人会青年部や一坪反戦地主会関東ブロック、八重山・白保を考える会、日の丸裁判を支援する会などの人たちと、“沖縄の自立”をテーマに勉強会をやっていたときのことである。彼は気軽に勉強会に出てきてくれて、ややずれな質問などにも、例の笑顔で、誠実に答えていた。この勉強会後の居酒屋での雑談が、多分、凝縮された人生を、悠々と生き急いだ中本正智さんと会った最後のように思う。

(沖縄大学教授)



カット・中本正智